熊野新聞掲載(H26.7.29)の新宮山彦ぐるーぷ紹介記事(共同通信社)

昭和25年10月3日第3種郵便物認可

30年前はやぶに埋もれ

行者の遺志継ぎ、整備

新宮山彦ぐるーぷ

熊野本宮大社（和歌山県田辺市）と奈良県吉野町を結ぶ修験者の道「大峰奥駈道（おおみねおくがけみち）」の整備を続ける登山愛好家団体「新宮山彦ぐるーぷ」（和歌山県新宮市）が今年6月、保全活動を始めて30年を迎えた。今でこそ世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として知られるが30年前はやぶに埋もれた道だった。

「昔は20キロ背負って登ったんだけど、最近はさすがにつらくてね」。山彦ぐるーぷが管理する行仙（ぎょうせん）宿山小屋までの高低差約200メートル、1時間近い行程。急な山道を事務局を務める沖崎吉信さん（66）は10キロの土のうを背負って登った。

メンバーは自分の荷物のほかに、小屋に補充する食料や毛布、土のうなどを背負い足早に登る。道幅が数十センチしかないような区間も登り終えると、ヒルに足をかまれていないかを確認。倒木の撤去や雑草の刈り取りのほか、間伐された木を持って山を登り下りし、道の補修をする。

奥駈道は、世界遺産として登録された参詣道の中でもとりわけ厳しい修験道。総距離120キロのうち、大峰山系の尾根をたどる難所だらけの約90キロの道は、ベテラン登山家でも5日かかる。

古くは7世紀から利用された道だが、国家神道を推し進めた明治政府下での廃仏毀釈や修験道廃止のあおりで衰退。奈良県下北山村からの南半分約45キロは宿泊施設もなく人が入れない時代が長く続いた。

山彦ぐるーぷは1974年、登山愛好会として発足。奥駈道の整備を目指した行者の遺志を継いで84年、前代表の玉岡憲明さん（88）が「修行に集中できる環境をつくりたい」と活動を決めた。

当時、高さ2メートルを超えるクマザサが生い茂り、道を切り開くだけで3年かかった。メンバーが3年かけ少しずつ木材を運び、90年には30人以上が泊まれる行仙宿山小屋を建てた。「なるべく自然に近い状態にしたい」と、手間がかかっても道の舗装には木材を使った。

そうした活動で復活した奥駈道は2004年、世界遺産に登録。今も毎週のように山に入り、活動回数も1770回を超えた。代表の川島功さん（73）は「私生活でも精進料理を貫く厳しい修行をする行者、亡くなった家族の供養登山をする方、そうした人との出会いが財産だ」と魅力を語る。

冬には道に打ち付けたくいが霜で浮き上がってしまうため、雪が解ける春先には木づちをかついで、山中を歩いて回る。11年の紀伊半島豪雨で出た倒木の処理のために、チェーンソーを持って山を回った。

メンバーは和歌山県を中心に約50人。平均年齢は70歳を超え、人手が必要な作業は厳しくなりつつある。それでも川島さんは「一人一人できることをすれば良い」と活動を続けている。